



●総会第二部MRAミニ・シンポジウム「若い在外日本人から見たニッポン」より

第十三回MRA日本キャンペーン 「心の国際交流パートIII」の開催 五月二十日から決定

第九回通常総会開催

社団法人国際MRA日本協会第九回通常総会は、去る昭和六十三年十月十日午後二時より東京永田町の憲政記念館で行われ、八九年度事業計画書(概要は14Pに掲載)及び収支予算書が満場一致で原案通り可決された。

第十三回MRA日本キャンペーン

「心の国際交流パートIII」の融和と世界への貢献 ●環境と開発―産業の役割と責任を考える―は、五月二十日から二十一日まで小田原市のアジアセンターで開催される小田原国際会議を皮切りに、東芝労使との交流会、関西プログラム、東京プログラムなど多彩な行事が予定されている。昨年同様、海外からの代表を招くと共に日本在住の留学生・難民及び外国人を交え、真の意味での日本の開国を進めるための具体的な行動を起こす機会としたい。また特に、地球の環境保全のための産業の新しい役割と理念を探ると同時に、私達一人一人の役割を考える。主なスケジュールは以下の通り。

- 五月二十日(土) 小田原会議
- 二十一日(日) "
- 二十二日(月) 東芝労使代表との交流会(箱根)
- 二十四日(水) 関西プログラム
- 二十五日(木) 関西連との午餐会
- 二十七日(土) 関西集会
- 二十九日(月) 東京プログラム
- 三十日(火) 東京集会

以上

(なお、詳しい案内状を間もなく発送する予定です。ご参加を心よりお待ちしております)

■提言「政治臨調」/亀井正夫

2P

政治改革を行うには結局第三者的機関が必要だというのが我々の考えです。行革審にしても、本来は政治と行政が自ら扱うべき問題であったわけです。また、国会審議といってもそもそも国会の先生方には自己改革能力がありませんので……

■MRAミニ・シンポジウム「若い在外日本人から見たニッポン」

6P

日本の若者は「国家」というものに対する意識が余りにも欠けていると思うのです。こんな人間が増えてくると日本は戦争ではなく、自己中心主義、無国家主義というものによって滅びてしまうのではないかと時々考えることもあります……

■アフリカ・ザンビアで遇した2年間(その6)

13P

「誰も責任をとろうとしない職場で一人で頑張っても辛いだけだよ。何でもハイハイと言いなさい。そして何もやらないのが一番なんです。そうしたところで結局何も起こりはしないのだから……」。悪魔の囁きとはまさにこのことだと思った……

■インドMRA会議「開発のための対話」レポート/川口昌宏

15P

人間が造った宗派の壁など、なんという愚かなものであろうか。人間の原点に戻ってお互いの根底にある生命への尊敬と感謝を共有できたことは、信心薄い私にも抗しがたい感動であった。私は生き生きと喜びに満ちて生きたいと思った……

1986年8月に始まったコー円卓会議(日米欧財界人円卓会議)はこれまでにスイスのコーにおける3回の円卓会議、日本(87年)及びアメリカ(88年)における2回のキャンペーンを行った。これらに参加した日本人参加者グループは昨年以來内外の広範な問題について研究し、意見交換をはかる会合を定期的に開催してきた。

これは、「日米欧の経済人が、道義的価値を共に尊重し、先ず自国において自らを正すことによって、建設的かつ抜本的な変革をもたらす触媒の役割を果たす」という円卓会議の理念を具体的に実行していこうとの参加者の希望で始まったものである。昨年10月13日の会合ではゲストスピーカーの住友電工亀井会長が「政治臨調」について問題提起を行った。国鉄再建管理委員長として民営分割を行った同氏は国鉄改革は外圧によらない日本の自己改革能力を示す最後のチャンスであったが、日本が国際社会に貢献する国として21世紀を迎えるにはこれからも抜本的な改革(行政、産業構造、教育、政治)を行う必要があり、そして、これを進めるには政治改革は避けて通れないとして、「政治臨調」の提案を行った。

以下はその概要である。

一、政治改革なくして 行革なし

昨年春、私が委員長を務める社会経済国民会議(註1)の政治問題特別委員会が「議会政治への提言」をまとめ、日本の政治を改革するために臨政治制度調査会(政治臨調)の設置を提言しました。

ご存じの通り日本は、行政、立法、司法の三権分立制をとっています。行革審で非常に苦勞したことは、まず法案を行政府と話し合っても、行政府が納得しないことにはそれを受け入れてもらえないということでした。次に、その法案を審議して成立させるのは今度は国会の仕事です。

やっと行政府を納得させても、国会で積み残されている場合が多いのが実態です。許認可はほとんど法律で裏づけられており法律を改正しないことには行革も実行できません。ところがマスコミや一般の人々はその

辺りの事情を理解せずに「行革はなかなか進まない」と批判しますが、政治家が国会で法案を通ささせてくれないことには行革は成立しません。つまり政治改革なしに行革は実現しないのです。

なぜ国会は国民の期待するような政治や改革ができないのか、いろいろ

ろ勉強してみたところ様々な問題点が見えてきました。まず今の政治体制では二十一世紀への準備はできません。また、これからの日本は国際社会の中でグローバルな視点を持つて方針を決めなくてはならないのですが、どうもそれができていません。このままでは大変なことになると我は痛感しまして、戦後政治四十余年の功罪を「議会政治への提言」の中で分析してみました。

まず、他の先進国の政治と比較して、日本の政治には次のような六つの特異な点が見受けられます。

- 一、金権政治、利益誘導型政治
- 二、政党の利害調整機能の低下、国際化に対応不能の構造
- 三、政治の細分化、行政化の進行と「族議員」の台頭
- 四、政権交代の欠如、感覚の麻痺した国会議員
- 五、拍車のかかる国会の地盤沈下、国民の政治に対する不信感の増大

六、手段の目的化、あるいは政党の自己改革能力の衰退

したがって、これらを改善していくと同時に、世界の経済の中でこれだけ日本の占めるウエイトが大きい時代ですから国際化ということも充分考えなくてははいけません。



亀井正夫 (かめいまさお)

住友電気工業株式会社社長。

大正5年和歌山県生まれ。東大法学部卒業後、住友本社入社。後に住友電気工業に転じ、昭和48年に社長、57年に会長に就任し現在に至る。58年からは国鉄再建管理委員長として国鉄の分割・民営化に大きく貢献した。現在、関西国際空港株式会社社長、日経連副会長も務める。

「カンナ燃ゆ」、「改革への道」などの著書がある。

二、第三者機関の

設置

政治改革を行うには結局第三者の機関が必要だというのが我々の考えです。行革審にしても、本来は政治と行政が自ら扱うべき問題であつたわけです。また、国会審議といつてもそもそも国会の先生方には自己改革能力がありませんので、第三者である我々が政治臨調を始めようと思つたわけです。

行革の場合には行政の問題ですから総理大臣の権限内の委嘱になります。国会の改革となると総理大臣から衆参両院議長に権限が移ります。但し、両議長は国会議員の承諾を得ないで第三者機関を設置することはできません。

第三者機関を設置した場合、その委員の教は可能な限り少なくするのが理想です。臨教審の場合は二十五人の委員を抱えています。船頭多くして船山へ登る」という喩えの通り、様々な議論が出てなかなか意見がまとまりません。手前味噌で恐縮ですが、国鉄再建監理委員会の時は委員長を含めて五人の委員でしたが議論が対立することはあつてもまとまりがありました。今回の政治臨調は、委員長と四人の委員を置き、

委員がそれぞれ部会長を兼ね、更にその下に専門委員を配するという構想です。

第一部会では改革の基本理念と今後の政治のあり方について長期的なビジョンを議論します。

アメリカでは、外交や防衛といった長期的視野を必要とする問題は上院が担当し、日常の内政の具体的問題は下院で審議するといったシステムが、最近乱れてきつつあるとも聞きますが、一応それなりの機能を果たしています。

参議院無用論というのがありますが、憲法で二院制と決められていますので、参議院の廃止となると、まず憲法を改定しなくてはなりません。しかし、憲法改定については様々な問題があり国論を二つに割つてしまふ恐れもありますので、現行憲法のまま両院の機能分担を考えてみたいと思います。

日本にはかつて貴族院があり、貴族の利害を代表していた反面、広い立場で政党色に囚われない公平なチェック機能もありました。参議院も良識の府として非政党化した立場で、衆議院の議論を公平化させようと、第一回選挙に当選した山本有三氏のように良心的な人が「緑風会」(註2)を結成し、力を發揮していたのです

が、時を経るにつれて政黨としてしまいました。更に、明らかに政黨色が強めるシステムである比例代表制が導入され、参議院本来の理想とは全く別の方向へ進んでいます。

参議院と衆議院の機能の違いを議員の先生方に尋ねてみたところ、「衆議院は予算中心、参議院は決算中心」という答えでしたが、実際のところは国鉄再建案の審議にしても衆議院の運輸委員会と参議院の運輸委員会と同じことを繰り返していました。また、参議院の決算委員会では、今年の決算を行い来年の政治に反映させるどころか、なんと三、四年前の決算を議論している有様です。

また、衆議院には解散があります。参議院にはそれがありません。六年間身分を保証されているのですから、解散を心配せずに外交、通商教育などの長期的な問題を議論するというように機能分担をしなければそれなりの意義があると思います。

次に議員定数問題ですが、現在の国民世論には、衆議院なり参議院の議員数が少ないから増やした方が良く、という意見は全くありません。国会議員が多すぎる、というのが一般世論です。

衆議院については本来議員定数は公職選挙法で四七一名と定められて

いるのですが、選挙区の変更がある度に増やしてしまい現在五一二名と四名定員を上乗せした暫定措置が採られています。したがって、日本の国会議員は衆議院が五一二名に参議院が二五二名の計七六四名います。アメリカは上院が一〇〇名に下院が四三五名の計五三五名です。人口はアメリカが日本の約二倍の二億三千万人ですから、日本は国会議員一人に一三万人ついているのに比べアメリカは議員一人に四三万人もつくとついう計算になります。この点からも議員定数についても相当議論する必要があります。

三、選挙制度と政治

資金の改革

第二部会では国会審議を検討します。各委員会は本来、与野党間の討論の場なのですが、大臣なり政府委員なりの政府の人を呼んでいきます。すると、どんなことが起こるかといえますと、一月の予算委員会では色々な質問が出るわけですが、総括質問の時になると大臣全員を朝十時から夕方まで釘付けにして、さらにはどの大臣にどんな質問がされてもいように、各省の局長、課長連中が控室に入り切れないほど廊下に溢れてしまうのです。結局その間、

行政機能は完全に麻痺してしまいましたが、これも外国では類の無いことです。

自民党では、大臣と政務次官という非常に魅力のあるポストを各派閥に順番に配分することによって党内バランスを保とうとしています。国鉄改革中に当時の中曽根首相から、「国鉄改革は非常に大事な仕事です。運動大臣の任命も慎重にします」と私にお話があったのですが、実際には四年間で運輸大臣が五人替わりしました。それに伴い政務次官も替わるので、私の理想とは程遠いわけです。イギリス式に大臣と政務次官だけが答弁するという方法をとれば、このポストにはベテランが充てられることになり政治にとっても行政にとっても効率が良くなると思います。

第三部会では選挙制度をとりあげます。今の中選挙区制は非常に欠陥があり、大選挙区制が理想です。例えば日本を電力サービス・エリアのように、北海道、東北、関東、東海、関西、中国、四国、九州と地区分けして比例代表制を行えば、金の使いようがありませんし、良い人が選ばれると思います。先般、後藤田正晴氏とも討論したのですが、後藤田氏の意見としては、「大選挙区制が一番

理想だが、国民の価値観の対応によっては小党乱立型となり、フランスやイタリアのように連立政権で政局不安定の状態になってしまう」ということです。フランスは今年から一区一議員の小選挙区制に変えます。小選挙区制の難点の一つは、面積が小さくなるので金は節約できるが、腕力が頼りの利益誘導型の政治になりがちなこと、かつてイギリスがこれに悩み規制したわけです。そして最大の問題は有権者の票が生きるか死ぬかのどちらかになってしまふことです。例えば有権者の四割が社会党に票を投じて、残りの六割が自民党を支持した場合、その四割の票は政治に反映されないわけです。社会党が小選挙区制に根強く反対する理由はそこにあります。後藤田氏は著書「政治とは何か」の中で、小選挙区制と比例代表制の併用、つまり現行の選挙区一三〇を三〇〇に分け、衆議院五〇〇議席の三〇〇を小選挙区選出にして残り二〇〇を比例代表選出にしてはどうかと提案しています。各党の党首も比例代表でトップになりますし、自分の選挙区で運動をしなくてもすみません。死票が生まれることもありません。ドイツはこの方式を公平選挙制度と呼んでいます。

第四部会では現在問題になっている政治資金について議論します。三木首相の時に政治資金規制法が強化されましたが、現在は抜け穴として「パーティー」という方法があります。選挙を公営制度に変えるというのも一つの方法ですが、浄財を広く募るという手もあります。例えば共和党と民主党が対立するアメリカでは、個人献金といって例えば給料のパーセントを自分が支持する政党に寄付する慣習があります。また、スウェーデンでは三年に一度、資金集めの手段として各党が宝くじを発行しています。日本人は宝くじが好きなので、こういった例を参考にし、とにかく政治家が金集めに駆けずりまわらなくてもすみむ方法を考えだすべきです。

このように四つの部会を設け、政治改革に向けて提言することを考え、原衆議院議長と藤田参議院議長にそれらをお話したところ、「政治の評判が悪いので改革しなくてはいけない。しかし、政治家は選挙に当選しなければ意味がなく、優れた改革案が必要なので、もう少し検討させて下さい」というのが原衆議院議長の意見でした。一方、藤田参議院議長は参議院の比例代表制に悩んでおり「真剣に検討させていただき」と真

面目に受け取ってくれました。

また、自民党の安倍幹事長ともお会いしました。政治改革の必要性は口にしていましたが、党内にも色々な意見があり、また福島県知事選や税制問題などで忙しい時期でもあり、「もう少し落ち着いた頃に党内でも議論し、望ましい方向へ進むよう努力したい」と話していました。

社会党の土井委員長は「改革は必要ですが、私どもは野党第一党としても今以上に議席を減らすわけにはいきませんので、議席を減らすような委員会の案には賛成できません」と言うので、私が「野党第一党と言いますが、その野党第一党とは一体何ですか？」と問いかけようとした時、ちょうど時間切れとなってしまいました。

民社党の塚本委員長は、「民社党は勢力が弱いので、財界人、有識者の方で世論を興し政治臨調が取り上げられる空気を作ってください」と一番熱心に同意してくれました。

公明党の矢野委員長は、「そのような改革路線ができればそれに乗ってゆきたい。ただ、公明党も何分小党ですので勢いを作ってください」と話していました。

社民連の江田代表も「自分たちは全く異存ありません。大勢がその気

になれば必ずできるでしょう」と話していました。やはり自民党がハラを決めて取り組めば世論も興り、好ましい方向に進んで行くと思います。経済四団体はいずれも政治改革を強調し、改革を行うのであれば第三者による臨調方式という意見を持っていきます。先般、四団体の各首脳と自民党三役が懇談した時にこの件について三役は「党内事情もあり言い出しにくいですが、我々が取り上げざるをえない世論を興して下さい」とのことでした。

労働組合の方は傘下の自動車総連の徳本委員長が最近、小選挙区制を取り上げ、宇佐美会長がそれを支持した同盟側は小選挙区制志向にあります。しかし、総評系は社会党とはまだ縁が切れていませんし、「選挙制度はもっと慎重に討論すべき」という議論も労働界全体にあつて、連合としての意思統一はまだできていません。しかし、政治を正さなくてはいけないということは共通に感じているようです。

四、議会制民主主義 百年を飾るために

私が臨調に関係し、改革の必要性を痛感していた時に、レーガン政権のブレインを務められたこともある

ノーベル経済学賞を受けたミルトン・フリードマン教授とお会いする機会がありました。教授は自由経済主義、マネタリズム(註3)を理想とし、「政府は小さい方が良い」との考えを持っています。また、著書「選択の自由」の中で非常に興味深いことを言っています。

- 一、自分の金を自分のために使う
- 二、自分の金を他人のために使う
- 三、他人の金を自分のために使う
- 四、他人の金を他人のために使う

の四つのカテゴリーがあるそうです。一は経済効率がよく、道義性もあります。二は自分の金を他人のために使うのですが、相手の本当のニーズにかなかなか上手く応えられませんので経済効率は落ちます。三の例で一番顕著なのが社用族です。経済効率は高くても道義や倫理面では劣ります。四のやり方が政治だと言われていますが、経済効率もよくありませんし、倫理性も劣ります。国民の金を政治家が野放図に使う現在のような政治は改めてもらわなくてはなりません。日本で議会制民主政治が始まったのが明治二十三年(一八九〇年)ですから、あと二年で一〇〇年目を迎えます。ですから、税制問題がヤマを越えた時にでも国民世論で政治家

が取り上げざるをえない。会政治のあるべき姿」を追い求めていってはどうでしょうか。現状のままの政治を続けていると国際社会の中で日本はとり残される危険があります。政治体質を改善しないことには二十世紀の繁栄も期待できません。大雑把な話になりましたが、何かお気付きの点なり批判がございましたら、是非ともご指導をお願いいたします。また、このような趣旨にご賛同頂けましたら、是非とも方々で宣伝して下さいようお願いいたします。

(註1) 社団法人社会経済国民会議議長は稲葉秀三氏。労使、学識経験者が一体となって生産性を高めてゆく日本生産性本部系列の提言団体。これまでに税制、教育、国際交流等様々な問題への提言を行っている。

(註2) 不偏不党の会を目指し、山本有三氏、和田博雄氏らが中心となり昭和二十二年に結成。

(註3) 経済安定を図るために、金利操作などの通貨政策を重んじる考え。

第十回通常総会 開催

社団法人国際MRA日本協会第十回通常総会は、去る平成元年二月十二日午後二時より東京六本木の国際文化会館講堂で行われ、昭和六十三年年度事業報告書及び昭和六十三年年度決算報告書が満場一致で承認された。「MRA五十周年と昨年の活動」についてのスライドも上映された。引き続き第二部の文化講演会「日本語留学生の現状と問題点」が、中国人留学生を含む三名のスピーカーを招いて行われ、最近マスコミでしばしば取り上げられている同問題に対する理解を深めた。



第九回通商総会第二部としてMRA文化講演会、「若い在外日本人から見たニッポン」が昨年十二月十日(土)に憲政記念館で行われた。日本企業に勤務する若い外国人、留学生、そして難民学生など六名のスピーカーが日本で生活して感じたこと、日本人に望むことなど卒直な意見を発表した。

尚、講演会終了後に懇親ティーパーティーも催され、参加者との活発な意見交換が行われた。その様子をお伝えしたい。

おこたわり

スペースの都合上、発言は要約してあります。また、質疑応答の部分は省略いたしました。

司会

ただ今よりMRA文化講演会「若い在外日本人から見たニッポン」を始めたいと思います。本日はアジア・オセアニア地域から来日された五名の、ご覧の通り、特に若い在外日本人の方々をお迎えしました。現在日本の企業に勤務中の方、留学生、そして難民として日本に定住している方々など背景も様々です。長

い方で既に滞日十一年にもなり、短い方で二年と伺っています。

最近、日本で勉強、或いは働こうとする外国人に関する様々な問題が改めてマスコミで大きく取り上げられています。例えば留学生の問題一つにしても、前首相が西暦二十一年までに十万人の留学生受け入れを表明したこともあり、日本で学ぶ留学生の数は昨年度で約二万五千人、そして現在日中間で問題となっている就学生も三万人に近づいたと言われる程、ここ数年来急激に増加しています。しかしながらその受け入れ体制はソフト面、ハード面ともはな

国人から見た ニッポン

(土) 午後2時30分—5時



はだ不十分であり、特に最近目立っている日本との経済格差を背景とした就労目的の外国人の増加などにより、住居、アルバイトなど様々な分野でトラブルが頻発しており、真面目に勉強している留学生の皆さんへの影響も深刻だと聞いています。日本の国際化推進ということで人的交流は活発化する一方、労働市場は閉ざそうとする方法自体が実態を反映しておらず、もともと無理があったということかも知れません。既に日本社会に対する誤解や幻想、過大な期待が原因で文化的人種の摩擦も生じています。

今は特に外国人学生の問題に触れましたが、勿論日本にはこの他にも近年多数の外国人が合法、非合法問わずるめて様々な形で入ってきており、その傾向はますます強まることと想われます。今までの日本は、異なるものをいかにして日本に同化吸収していくかということには長けていたのですが、ようやく、そして好むと好まざるにかかわらず「異なる価値観、異なる文化」といかにして上手くやっていくか、そんなテクニクを学ぶ時代に入ったのかなという気がします。

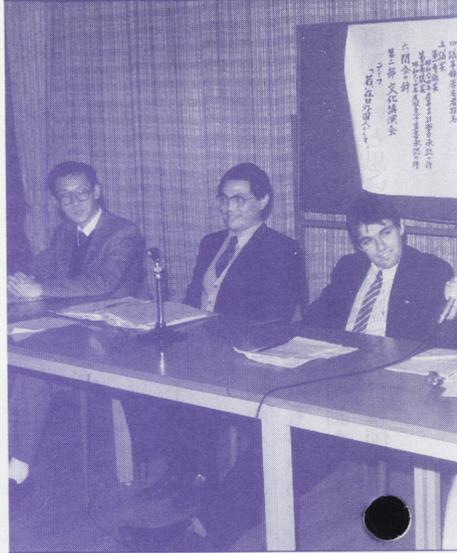
一方、日本人の側から見ると、報道だけでは伝わって来ない音を聞

きたいと思ってもなかなかそんなチャンスがないのが現実ではないでしょうか。交流の乏しさが双方に誤解を産み出し、それが新しい偏見の土壌ともなりかねないという気がします。勿論外国人と一口に言っても、一人一人国籍も背景も違いますし、理解不足、誤解ということも当然有り得るでしょうから言い分が必ずしも正しいと断言はできません。日本人にしても、うわべだけ体裁を整えればそれで国際化、国際人と言えるのか、そんな疑問を抱かざるを得ない例も山ほど見かけます。

大切なことは同じ土俵に立ち、対等の立場で、もし間違っていることに対しては間違っているとはっきりと言い、一方、正すべきことがあれば素直に正すという精神がお互いに必要だということであって、そういう姿勢がないといくら「国際化」と叫んでも絵に描いた餅どころか、危険な方向へ行く恐れさえあると思います。

以上のような意味において本日お招きした五名の方々は、日本在住の外国人としてMRAが自信を持ってお薦めする論客揃いです。彼等がこれまでの日本での生活で感じていることや日本・日本人に望むことなどをそれぞれの視点から率直に助言し

MRA文化講演会



若い在日外国人 ニッ

●日時 1988年12月10日
●場所 憲政記念館

て頂き、私達が「世界に貢献できる日本人」として国際化をいかに心の中から進めていけばよいのかを探ってみたいと思います。日本人には耳の痛い意見がでるかも知れませんが、それも日本の将来を思えばこそとお考え頂きたいと存じます。最初に約十分間ずつそれぞれのテーマに基づいたお話を頂き、その後会場の皆様と活発な意見交換をして頂きたいと思います。

それではトップバッターとして台湾の郭英傑(クオ・インチェ)さんをご紹介します。郭さんは七十七年に来日され、亜細亜大学及び同大学院で経営学を専攻されました。現在、「株」日本マンパワ―国際部に勤務されています。「日本で学ぶアジア系留学生の就職問題とアジア人差別について」というテーマでお話頂きます。それでは郭さん、お願いします。

都内在住外国人の 八割近くがアジア系

郭英傑

皆さん今日は。トップバッターなので大変緊張しています。本日は自分が中国人ですから、アジア系外国人の立場で話させて頂きます。

先ず、現在東京に在住するアジア系の人達の数簡単に述べたいと思います。最近の新聞報道によれば、都内の外国人登録者数は既に二十万人を超えたということです。登録していない外国人、つまり滞在九十日以内の外国人はこの中には含まれません。

登録者数上位五カ国のトップは韓国で、その中には朝鮮籍の人も含まれます。二位は中国、三位はアメリカ、四位はフィリピン、そして五位

がイギリスです。現在の数を八十五年五月当時の数字と比べてみますと韓国の場合は、当時七万九千人、現在八万七千人で増加率は一〇%、中国は当時二万二千人、現在五万五千人で増加率は二六〇%です。アメリカは当時一万三千人、現在一万四



日本で学ぶアジア系留学生 の就職問題とアジア人差別 について

千人で増加率は七%です。フィリピンは当時二千人、現在は一万一千人で増加率は四五〇%です。イギリス人は当時二千人、現在五千人で増加率は一五〇%になります。上位五カ国の中にアジアの国が三カ国も入っています。二十万人中、十五万三千人がこのアジア三カ国の人達で、都内在住外国人の七六%を占めます。ほとんどの日本人は、外国人というとすぐ欧米系で英語を話すというイメージを持っていますね。しかし、実際の数字を見ますと、都内在住外

国人の実に七割以上がアジア系の人です。そして東京都全体の外国人の約三割が中国系です。シンガポールとかタイとかマレーシアから日本に留学する人も、その六、七割が現地の華僑の子弟です。中国人が多く住んでいる豊島区では中国語の広報誌の発行を検討中だということで大変嬉しく思っています。

「就学生問題」の背景に

さて、ここ二、三年で日本語を学ぶ就学生の数が急増し、それに関連した様々な社会問題が起きています。一部で外交的な問題にまで発展しました。この問題を詳しく説明しようとするので三日間あっても足りませんので要点だけ言いますが、就学生が現在一番困っていることは滞在ビザの問題です。入国管理局や法務省があまり非難したくはないのですが、私達にはどうしても納得出来ない面があります。例えば日本で勉強するための必要な書類を入国管理局の指導の通りに揃えて提出しても、ビザをくれないとか、審査官によっては同一ケースなのにならぬ判断をするとか、私達外国人の目には日本がまるで今だに鎖国主義をとっているのではないかとすら映ります。

欧米人には甘くアジア人には厳しい日本企業

次に就職問題ですが、日本を勉学の場を選択し、日本語や日本のことを沢山勉強して、日本で就職、又は海外の日本企業に勤めたいと思っっている留学生に対してもう少し就職の機会を提供する必要があるのではないかと思います。多くの留学生は自分の国と日本との懸け橋としての役割を担いたいと願っています。日本企業は留学生に対してどのように対処しているのでしょうか。ほとんどの日本企業は欧米系の人には弱いが、アジア系の人には強い態度を取ります。欧米系の人達は労働条件や待遇面で手厚く優遇されるのに対し、アジア系は日本人並でよい、別に日本人と差別はしていないんだからいいでしょうということなんです。休暇の取り方にしても欧米系の人には極端な話、国が遠いから四十日間夏休みが与えられても、同じ外国人であるアジア系の人には日本人並のせいぜい一週間しかくれず、我慢してくれと言われます。やはりこれは差別と言わなければなりません。どうか日本人の皆様も同じアジアの一員として他のアジア人のことを一緒に考えて頂きたいと思えます。

司会

有難うございました。次に現役の留学生である韓国の鄭相遠(チョン・サンウォン)さんに「韓国人の日本人に対する一般的な見方と日本に望むこと」というテーマでお話頂きます。鄭さんは京畿道大学で日本文学を専攻後、八十六年に来日し、現在早稲田大学文学部にて社会学を専攻中です。将来はジャーナリストとして国際的に活躍する夢を持っているそうです。それでは鄭さん、お願いします。

韓国人と日本人の発想の違い

鄭相遠

ご紹介頂きました鄭と申します。一般のソウルオリンピックも無事終了し、韓国人だけでなく日本の方々にも大変喜んで頂いたことを感謝致します。

さて今回、韓国の観衆が自国や欧米の選手ばかり応援して、日本選手は全く応援しなかったことを、大変不満に思われた日本人の方が多かったと思います。一方、あんなことは当たり前のことだと考えている韓国人も多いのです。このことを少々説明したいと思えます。

韓国と日本の付き合いは遡れば聖

徳太子の昔からあり、概ね友好的であったのですが、豊臣秀吉の朝鮮出兵、そして伊藤博文や福沢諭吉の時代にも色々とあつて関係が悪化しました。今日に至っても歴史的な感情が韓国には残っており、韓国人の反日感情にはそういう歴史的な背景が相当あるのです。



韓国人の日本人に対する一般的な見方と自分が日本に望むこと

では韓国の若者達は日本をどう見ているのでしょうか。私自身も新世代、新人類と呼ばれる若者の一人ですが、日本に対して否定的な見方をしている友人達が周りに結構おります。実際に彼等が日本に来て辛い体験をしたということではなく、教科書などから得た知識に影響されているのです。韓国の教科書の三分の一か四分の一は日本関係の記述で占められています。日本が韓国をいつ侵略したとか、韓国を植民地支配した

時、どんなひどいことをしたとか、そんなことが沢山書いてあります。私自身は、良い日本人の友人にも恵まれましたし、日本で嫌な目にあつたことは一度もありませんが、とにかく若者に関しては教科書などから受ける影響が強いということが言えます。

自分の従兄に見る在日韓国人の葛藤

日本に来てから色々な資料を調べて研究してみました。日本人と韓国人の考え、発想、感覚にはやはりかなりの違いがあるという気がします。例えば日本には出る杭は打たれるという言葉があるように、日本人は控えめに振る舞います。一方、韓国語には尊敬語と丁寧語はありますが、日本のような謙譲語はありません。へり下る言葉がないということとは行動様式にも当然関連してきますので、韓国人と日本人の間にはそうした基本的な感覚の違いから生ずる難しい問題が沢山あります。どうぞ皆様も文化の違い、感覚の違いというものを理解して頂きたいと思えます。それから私が特に皆様に考えて頂きたいことは、在日韓国人の問題で

す。在日韓国人という指紋捺拒否の問題がありますが、そのことではありません。私の従兄は日本で生まれ育った在日韓国人二世で名古屋で会社を経営しています。彼の父は戦時中に日本へ強制的に連れて来られました。彼は韓国へ行けば在日韓国人と言われ、日本では在日朝鮮人という宙ぶらりんな存在です。一体自分の国はどこにあるのか、どこへ行けば真の母国があるのかという彼の訴えを真剣に受け止めて頂きたいと思えます。

日本では国際化の議論が盛んですが、英語を学べば国際化するというものではなく、心の触れ合いがなければならぬと思います。相手の国の文化や違いを理解しようとする姿勢から真の国際化が始まると思えます。

司会

有難うございました。次にオーストラリアのロン・グリーンさんをご紹介します。グリーンさんは現在、富士銀行国際業務部に勤務中ですが、高校生の時、北海道北見市の高校に一年間留学したのが日本との付き合いの始まりだったということ。その後、その後も筑波万博オーストラリア館スタッフとして働くなど、日本で多彩な体験をされています。「外国人は

日本で働けるか?」日本企業で働く外国人の視点」というテーマでお話頂きます。それではグリーンさん、お願いします。

日本で働く外国人の 不満の原因とは?

ロン・グリーン

私は今年の一月に富士銀行に入行しました。富士銀行は三年前に日本国内での外国人採用を始めました。もちろん海外支店では現地採用の人達が沢山働いていますが、彼等はあくまで現地法人に雇われているのであり、日本国内のいわゆる「皆様の富士銀行」に採用されたということではありません。

現在、富士銀行本店では私のような日本語の会話や読み書きが出来る外国人が二十人程働いています。富士銀行のように外国人を採用する日本企業が最近随分と増えてきたようです。有力企業の中にも五十社くらいあります。

それらの日本企業で働く外国人達に聞いてみると、余り満足していない人がほとんどのようです。もちろん日本企業で働くという良い体験ができ、日本語も上達することに関しては不満はないのですが、長く勤

めても将来出世する見込がないという理由で会社を辞めてしまったというような話を聞くことが少なくありません。国際化を図る日本企業としては、日本語が出来、人脈や知識を持つ外国人に二、三年で辞められてしまつては大変困ることでしょう。それではなぜ外国人が日本企業で長続きしないのか少々説明してみたいと思います。



外国人は日本で働けるか?
日本企業で働く外国人の視点

日本が学歴社会だということは、私よりも皆さんの方がよくご存じのことと思います。有名大学を卒業した人は頭も勿論良いのですが、どうして他の人達より早く出世しているのでしょうか。確かに彼等が記憶力に秀でているのは確かですが、人脈を上手に利用しているという点がとても重要なポイントです。大学の先輩や同級生が各界で強い権限や影

響力を持っている場合、そのコネを利用して自分の昇進に結びつけることは日本では珍しいことではありません。私のような立場の人間は自分の能力にしか頼れないのです。どちらのやり方がいいとは一概には言えません。私達外国人がこの学歴社会に入り込めない、そしてこのような日本人の人脈に頼るビジネスのやり方は、外国では通用しないということだけは確かです。

国際化もまず内面から

次に日本企業で働く外国人が、出世の障害だと考えているもう一つの問題についてお話します。会社や事業を長男、或いは家族の一員にそっくり引き渡す世襲(せしゅう)は、日本でよく見られる光景ですが、このことに私の言いたいポイントが最もよく表わされています。血縁者以外の者が一族の富を支配することを日本人は好みません。同様に日本の企業、例えば富士銀行なども似たような体質を持っています。会社の力と富は完全に日本人の手中になければならないのです。それが果たしてベストなやり方であるかどうかはいずれ時が来れば分かることですが、もし日本の企業が国際化ということ

を真険に考えるのであれば、先ず自分達自身の内面の国際化から進めていくべきであり、それが企業の利益にもつながっていくというのが私の考えです。

日本企業で成功するためには日本人であることが前提条件ではなく、なことを願っています。たいへん短いスピーチでしたが、日本企業で働く外国人の姿を多少なりともご理解頂けたら幸いです。

司会

有難うございました。次にカンボジアのメアス・トミーさんをご紹介します。トミーさんは五人の中では最年少の二十四才で、現在東海大学に在学中です。トミーさんは、人類史上まれに見る恐怖政治や大量虐殺を行なったことで知られるポルポト政権下を、彼自身の言葉によれば空を屋根に、風を壁に、土を床にして生き延び、七十九年に祖国を脱出しました。その後タイのカオイダン難民キャンプでの生活を経て八十年に來日されました。彼は高校生の時ある文集に「日本は自分にとって第二の故郷であり、将来を決定する大事な国である」と書きました。今日は「不可解な国ニッポン」というテーマでお話頂きます。それではトミーさん、宜しくお話しします。

難民の立場にもっと理解を!

メアス・トミー

皆さん今日は。カンボジアのメアス・トミーです。カンボジアでは一九七〇年に戦争が始まって以来、現在まで十三年間にわたって戦闘が続いています。僕はそんな国から八年前、勉強したいという一念で日本に



不可解な国、ニッポン

來ました。僕が日本について知っていたことは、世界の中の経済大国、先進国であるということでした。皆さんもご存じだと思いますが、カンボジアは第二次世界大戦後、日本に対する賠償請求権を放棄した数少ない国の一つであったので、カンボジア人が困難に直面した時、日本人は必ず手を差し伸べてくれると信じて日本の土を踏んだカンボジア人は少なくありません。多くのカンボジア

の若者達は、戦争で教育を受けたくても受けられなかった分も日本で勉強できると、希望と不安の入り混じった気分で難民定住センターに入りました。そこで三カ月間、日本語の勉強をただで習慣も文化も違う日本の社会に行かなければならず、文字通り荒海の中へ放り込まれたような感じでした。

日本に住んでから八年が過ぎましたが、僕にとって日本は今だに不可解な国と言わざるをえません。世界の中に占める日本の役割は大きく、経済もこれだけ発展している国なのに、受け入れ難民に対する支援体制はまだまだ不十分で、民間のボランティア団体が頑張っているという状況です。アメリカやフランスに渡った難民はそれぞれの政府の手厚い支援を受けて自立していきませんが、日本の場合には例えば教育に関して言えば、難民の言葉のハンデイ等への配慮がなく、日本人と全く同じ制度の下で受験しなければなりません。どれ程、意欲があり、頑張ってきたかということとは問題にされません。又、皆さんもご存じの通り日本の教育費も高く、自分達の力だけでやっていくには限界があります。

僕は将来祖国へ帰って、日本で学んだ知識や経験、また日本人との友



●熱心に聴き入る日本の若者達

情を大切にして祖国の再建に協力できるよう頑張りたいと思います。日本も是非心の通ったリーダーシップを発揮して頂きたいと思います。

司会

有難うございました。それでは最後のスピーチになりましたが、日本の紅一点、ベトナムのブー・ティ・キム・ランさんをご紹介します。ランさんはホー・チ・ミン大学でロシア語を強制的に学ばされました。八十二年に家族の方々と共に祖国を出国し、元留学生のお兄さんのいる日本に定住しました。ランさんも大変な頑張り屋ですが、明星大医学部で医師を目指して勉強中の弟の кой君、そしてアメリカ留学中の妹スアンさんなど兄弟揃ってとても優秀で

す。ランさんの将来の夢は言語学者になることだそうです。今日は平和ボケした日本の若者について一言とすることで「現代の日本の若者」というテーマでお話頂きたいと思えます。それではランさん、お願いします。

自国を愛せない人は 他の国も愛せない

ブー・ティ・キム・ラン

最後のスピーカーということで大変に緊張しています。今日は日本の若者についてお話ししたいと思います。私は日本に来てからすぐ、大和難民定住センターで三カ月間日本語を勉強しました。その後、日本語学校や大学やアルバイト先で、多くの日本の若者達と出会い、色々感じたことがあったのでこんなテーマを選びました。私はお喋り屋さんですからとても十分間じゃ足りないのです、他の方々の分も喋らせて頂こうと思っています。

私は難民として日本へ来ましたが、祖国ベトナムをたまたまなく愛しています。しかし、共産主義によって祖国に居たくても居られない、国造りの手伝いをしたいと思ってもベトナムの国民として認められないから仕方なく日本に来ました。勿論私は日

本に居る限り日本を第二の祖国として是非貢献していきたいと願っています。



現在の日本の若者について

私が高まで接してきた日本の若者は「国家」というものに対する意識が余りにも欠けていると思うのです。現在の日本の若者は一度も戦争という厳しい環境に置かれたことがありません。欲しいものはすぐ手にはいるし、外国に行きたければアルバイトをすればすぐに行けるような恵まれた環境の中で、最近、自分さえよければそれで良いという考えの人が増えてきました。自分の国を愛せない限り、他の国を愛することは出来ないと思います。自分の両親、親戚を大切にしない人が他の人を大切にすることも出来ません。うわべだけ、口先だけでは本当に愛することは出来ません。

日本の若者に大学へ行く目的を聞

いてみると、男子は就職のめとか、日本は学歴社会だから大学へ行かないとまずいとか言う人が多いですね。女子は俗に言う「いいところのお嫁さん」になるためなんです。私はすぐもつたいたいと感じています。私がおしベトナムに居ることができて大学に行けたらもつと色々なことをやるのになあと思います。

日本の若者はなぜ国のことを 何も考えないのか？

日本の若者を見ていて感じるの、なぜ皆自分の国のことを何も考えないのかということです。私が国のために何々をしないとすると皆は、あなたは政治活動をしているんじゃないかと、或いはそれは自民党の仕事だとかそんなことを言うんですね。この娘はもしかしたら共産主義者じゃないかと、政治家の娘じゃないかと、そんな見方をされたこともあります。彼等の話題はホイフレンド、車、ディスコ、ファッション、海外旅行が中心です。日本はアジアの一国なのに、海外旅行や留学というとすぐアメリカ、オーストラリア、イギリス、フランスですね。それでフィリピンに行きたい？と聞くと行きたくないと言う。国際化と言っても偏っているんですね。先

程どなたか言われたように国際化とは単に英語を喋れるようになることだと思っている人が多いらしいですね。

自分の国を大切にしない、自分さえよければいいということを目的として生きる、さらに何の目的もなく生きていく人間も多いと思います。何の目的もないまま大学に行く、お金にも困らないから就職も別にしたくない、お嫁に行くまではまだ時間があるから、じゃあ大学でも行くかというような人も多いいんじゃないかと思いますが。こんな人間が増えてくると日本は戦争ではなく、自己中心主義、無国家主義というものによって滅びてしまうのではないかと時々考えることもあります。皆さんが日本人でいられるのは日本という国が立派に存在しているからです。例えば私のような立場になったらどうでしょうか。ベトナム人とはいってもしも国に帰れない、国民として貢献できない、だから私の存在もないということなんです。自分の国が存在するから自分も存在するんだと思います。このことを皆さんに強く訴えたいと思います。

ここにいらつしやる年配の皆様は、戦争体験のある方が多いと思います。なぜ子供達に辛かった体験、国を大

切にする精神を伝えないのかとても不思議に思います。辛い体験は自分達だけでいいという気持ちもよく分かりますが、ある程度はそれでいいとしても、全く伝えないというのはどうでしょうか。これからの日本は若者達がやっけていくんですよ。年配の方が亡くなって、日本を大事にするという精神を持っている方がいなくなったら、日本という国はどうなっていくのか考えてしまいます。

日本の若者達にも是非自分の国を愛してほしい。私の言う国を愛するということはヒットラーのような国家主義じゃないんです。自分の国を愛し貢献する、そして国際社会における日本のために色々と貢献するという愛国心なんです。これからの時代の責任をとる若い人が、こういう精神を次の世代に伝えていけばより良い日本になるのではないかと思います。日本という国は日本人一人ひとりのものなのです。その責任と義務を果たし、力を併せて立派な国を造っていくことは一人ひとりの責任だと思えます。

ぜひ皆さん、国、両親、友達を大切にしてください。そしてアジアの一人として他のアジアの人達と力を合わせてより良いアジアを造りましょう。

「天皇崩御と元英国軍人達による和解の投書」

昭和天皇の崩御以来、世界各国の多くのMRAの友人達から弔電やメッセージが寄せられました。これら多くの、新しい時代を築こうとしている日本国民に対する暖かい励ましの言葉に満ちています。昭和天皇の戦争責任について熱い論争が続いているイギリスでもMRAの関係者がメディアを通して日英両国民の関係改善に向けて努力が続いています。戦争中医師の妻として中国大陸で生活し、日本軍に乱暴な仕打ちを受けたマコール夫人がBBCのインタビューで、許すことによって過去の傷を癒し、過去への囚われから開放されると発言して感動を呼びました。第2次世界大戦で日本軍と戦った4名の元英国軍人が以下で紹介する投書を、1月7日(崩御の日)に元駐日大使ヒュー・コートッチ卿による今後の両国関係の展望に関する感銘深い記事を掲載した「タイムズ」などイギリス各紙に送りました。それは「インデペンデント」紙と「イブニング・テレグラフ」紙に掲載され、その一人レス・デニス氏はBBCのインタビューも受けました。彼はかつてMRAの会議で杉田一次元陸幕長が英国国民に対して謝罪したことを紹介し、大きな感銘を与えました。

第2次世界大戦で日本軍と戦った元英国軍人として一筆啓上します。

故裕仁天皇の大喪の礼に誰を英国代表として送るべきかを定めることは、その立場にある方々にとって如何に難しいことであるか私どもはよく承知しています。

今年は第2次世界大戦が勃発してから50年目にあたり、私どもは過去のことは過去の事として納めておくべき時に至ったと思います。勿論、戦争中の日本軍の残虐行為を直接体験した者として、それを忘れ去ることは出来ません。しかし、許すことは出来るということを私どもは体験から知っています。

個々の人(私達一人ひとり)の謝罪と許しが、世代から世代へと引き継がれていく憎しみの鎖(chain of hate)を断ち切る大きな力となる事例をこの目で見る事が出来ました。

最近の例では、(ソウル・オリンピックの時期に)韓国で開かれたある国際会議で、かつての日本による36年間に及ぶ苛酷な植民地支配に対する謝罪が日本の代表からなされ、それは即座に出席していた韓国の人々の間に大きな反響を呼び起こしました。一方、英国の代表は自国の新聞が掲載した日本の天皇を侮辱する記事について謝罪の意を表し、それに対しても日本側から英国人のステーツマンシップを高く評価する感動的な反応がありました。

わが英国の皇室がこの機会に、われわれ英国国民を和解の道へと導かれんことを切に祈る次第です。

ディック・チャナー 元第14陸軍砲兵隊

グアイリム・ジェンキンス 元第14陸軍通信隊

レス・デニス 元陸軍輸送隊(元タイメン鉄道捕虜)

デービッド・ヤング 元第14陸軍工兵隊

入会の御案内

社団法人国際MRA日本協会は、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する具体的な活動を行なっています。その事業の充実、発展を図るために左記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼びかけています。

(1) 正会員 個人 年額 3,000円

法人 年額

(2) 賛助会員 個人 年額 50,000円

法人 年額 1,000円以上

郵便振替口座

東京八一三八二八九

口座名 社団法人

国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく

機会の提供、②機関紙「MAJ」ニュース等の送付、③講演会、月例会等

のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り

●信頼できる人との出会い

●新時代に必要な情報

●心身の健康

●問題解決の秘訣

青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで 過ごした2年間 (その6)

寒河江 亮



悪魔のささやき

美術学部のインド人講師であるD氏は、極端にザンビア人を嫌悪し、かつ軽蔑している。彼によれば「ザンビア人とは、草原生活からいきなり近代社会の中に放り出された文化も教養も無いサルのような連中」だそう。彼はザンビアでもう十年以上教えているベテラン美術教師である。

「自分達は君達ボランティアとは違って金を稼ぎにこの国へ来たのだから、この国で働くウマミがなくなればおさらばするしかない。現に沢山の外国人技術者がこの国の前途に切りをつけて周辺の国々へ出ていったし、彼らの穴を埋めようにも他国に比べて待遇が劣っているからそれもなかなか難しい。ずるがしこいザンビア人は当然、日本のような寛大な国に目をつけ君達のようなボランティアをタダで送らせ、穴埋めしようとする訳だ。彼らが本当に心から君達日本人に感謝しているとも思っているのかい。もしそう思っているのだとすれば日本人は甘いね。彼らの本心は金、金、金、それしかないんだ。タダでくれるのならこの国からでも何でも大歓迎。ただし、将来もし日本が援助出来なくなる日

が来たら、君達や日本のことなんかキレイさっぱりと忘れさられるに違いないさ」と一気にまくしたてる。

その内容自体もショックだったが、そもそもインドという途上国の出身であり、発展途上国での体験豊富なこの温厚な風貌のベテラン教師が、このような驚くべき本心を隠しながら毎日学生達に講義しているという事実がもつとショックだった。これが教える側と教えられる側の関係なのだろうか。

途上国に働きにきたのだからいわゆるボランティアの理想に燃えている人もいるだろうと期待していたが、残念ながらこれまで知り合ったインド人、フィリピン人、パキスタン人の同僚講師達にそんな人は一人もいなかった。このエブリン・ホーン・カレッジの全講師の六〇%以上を占める外国人講師とザンビア人講師や学生達が、互いに協力しあつてより良い学園造りを目指しているという雰囲気を感じることは難しい。キャンパスを虚無感とマンネリズムが支配している。みんな国の発展よりも自分の発展、或いは金儲けのことを考えている。そんな状況下に日本政府派遣の無報酬のボランティアというほとんどのザンビア人にとって理解し難い身分で配置された自分達の立

場はいかにも微妙である。私達の語学も含めた能力への評価も厳しいものがあると聞いた。実績もない私達が無か新しいことを始めるためには相当なプレッシャーをはねのけねばならない。それがイヤなら平穏な二年間を過ごすべく、ひたすら目立たぬようにすればよい。何だか自分が段々いい加減な日和見主義者になっていくような気がして恐ろしい。「実際にそうならなければ自分が苦しむだけだよ」と、同僚のアジア人講師達が有り難くもそう忠告してくれるのだった。「誰も責任をとろうとしない職場で一人で頑張っても辛いだだけだよ。何でもハイハイと言いなさい。そして何もやらないのが一番なんです。そうしたところで結局何も起こりほしくないのだから……」。新米の同僚に親切にアドバイスしてくれる彼らには悪いが、悪魔の囁きとはまさにこのことだと思つた。

「私にとって写真とは」

今日で三学期の全講義が終了した。赴任以来早六カ月という月日が流れたことになる。この辺で一度、写真の講義や私の教え方に対する彼らの考えを知りたかったので、「私にとって写真とは」というタイトルで小論文を書かせた。その最大の狙いは彼

らにとつて写真が本当に興味の対象であるか否かを知ることだった。

「自分にとつてこの学部で最もエキサイティングな科目は、写真の講義である。授業がスタートしてから写真に対する興味も一段と強まり、カメラの購入を考えている」

(二二三歳 男)

「写真は私の人生に新しい体験と驚きを与えてくれた。それは興味の対象に止まらず、ジャーナリストとしての将来に向けて私自身を磨いてくれる」

(二一五歳 男)

「私はどうやら写真に対して間違つた印象を持っていたようです。これまで写真の良し悪しなど全く分からなかったし、第一カメラの構え方一つ知りませんでした。それが私の知っている写真の全てでした。私はカメラの操作法を学びましたが、次は自分の手でそのフィルムを現像できたらどんなにか素晴らしいことでしょう」

(二二三歳 女)

現在までのところ、彼等の期待と意気込みに充分に伝えてやれないところが大変残念で、責任を感じる。東京の協力隊事務局に申請した機材はいつ届くのかと彼らに聞かれる度に曖昧な返事しかできないのが心苦しい。恐らく彼らの在学中に届くことはない。何とか別の方法を工夫しない

くは……

「写真とは教室で理論だけを学ぶものではなく、実際に体験するものだと思う。実技を抜きにして写真を語ってもあまり意味がない。もし機材が使えたならば、もつと沢山のことを学べたらと思うと残念だ」

(二二三歳 男)

「ジャーナリストとしての様々な夢を実現させるため、可能な限り多くのことを教えてもらえることを心から望んでいます」

(二一四歳 男)

「私達の講師は熱心に機材を調達しようとしているが、大学当局が彼の努力だけに頼るのは良いことではない。彼の後を引き継ぐ新しい講師が彼と同じように努力してくれるという保証は何もないし、そもそも彼にそうする責任がある訳ではないのだ。将来この講座をより効果的なものにするために、大学自らが既存の設備や修理可能な機材の整備に着手するべきである。難しい状況だからといって諦めて施設にカギをかけてしまふのではなく、可能なことから一つずつ解決していくことが大切だ。カレッジ当局はこの講座にもつと力を注ぐべきである。もつと早くから写真を学びたかった」

(二二三歳 女)

(次号に続く)

MRA一九八九年の主な活動予定

国	内	海外
一月	<ul style="list-style-type: none"> ● 関西月例会 ● (神奈川大学教授、松岡紀雄教授講演) ● 第四回円卓ミーティング ● (ブリジストン・サイクル相談役、石井公一郎氏講演) ● 東京月例会 ● (日本大学教授、川口昌宏氏インド会議報告) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「第八回開発のための対話」会議(インド) ● ラテンアメリカ会議(ブラジル)
二月	<ul style="list-style-type: none"> ● MRA文化講演会(福岡) ● (キャンソ社長、賀来龍三郎氏講演) ● 第十回通常総会、文化講演会 ● (日本語就学生問題) ● 関西月例会 ● (一燈園同人、石川洋氏講演) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 第十五回国際青年育成スタディーコース(豪州) ● テーマ「効果的な生活の実践学習」 ● 円卓会議インドキャンベーン ● (テリー・ボンベイ・パンチガニ)
三月	<ul style="list-style-type: none"> ● 円卓会議インドキャンベーンに代表派遣 ● 関西月例会 ● (留学生・難民学生を交えてパネルディスカッション) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 国際青年育成プログラム(イギリス)
四月	<ul style="list-style-type: none"> ● バザー(東京) 	<ul style="list-style-type: none"> ● MRAジャマイカ会議
五月	<ul style="list-style-type: none"> ● 第十三回MRA日本キャンベーン(小田原・関西・東京) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 国際青年育成コース(インド) ● 教育・家庭会議(イギリス)
六月	<ul style="list-style-type: none"> ● 月例会 	
七月・八月	<ul style="list-style-type: none"> ● 第十四回理事会 ● 第四回日米欧財界人円卓会議準備会議 ● コー世界大会に代表派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ● MRA国際青年キャンプ(台湾) ● コー世界大会(スイス)
九月	<ul style="list-style-type: none"> ● コー世界大会報告会 	
十月	<ul style="list-style-type: none"> ● MRA国際チーム連絡調整会議 ● 第十二回関西秋季大会(神戸) ● 九州MRA協力会第十九次訪韓団派遣 	
十一月	<ul style="list-style-type: none"> ● 月例会 	
十二月	<ul style="list-style-type: none"> ● バザー(東京) ● 第十一回通常総会、文化講演会 	<ul style="list-style-type: none"> ● MRA国際青年チーム、タイ訪問(戦略村及び難民キャンプ視察)

「轍」にはまってしまった 社会からどうしたら抜け 出られるか……



川口 昌宏

日本大学理工学部教授。タイのアジア工科大学で二年間にわたり教鞭をとっていた際、カンボジア難民問題が発生。難民キャンプへの日本人ボランティアの受け入れと調整を図るためのジャパン・ボランティア・センター（JVC）の設立に参加、初代所長として難民救援に活躍した。

一、会議まで

歴史や地理の教科書では、インドは大きな存在感を持つ国であるが、経済優先の時代にあつては、我々には遠い国である。インドから日本を見れば、正に日本は経済大国であらう。すなわち、十年前の統計でも、国民総生産（GNP）において日本はインドの約八倍である。日本の人口は七分の一であるから一人当りのGNPは六十倍にもなるか。

今回の会議場への玄関口である工業都市ボンベイ周辺には日本から多数の有力工場が進出し、信頼性の高い日系の工業製品は、人々に日本を強く意識させているという。

この度の天皇崩御にあたって、インド政府が三日間、半旗を掲げたの

は、異例のことといわれており、インドの日本に対する期待の大きさを示しているともいえよう。

会議はボンベイから約二四〇キロほど山地に入った避暑地として有名なパンチガニーにあるMRAセンター、アジア・プラトーで行われた。

二、開会と祈り

会議には十六カ国から約二百名が参加した。海外からは歴史的つながりを示すように英国の九名が最多で、日本からは一名であった。他に、アフリカからの参加が目立ったが、これは会場近郊の古都プナに留学中の学生たちが多数参加したからである。

開会では、天皇崩御に対する黙禱も行われ、ここでも主催者であるインドの友人たちの日本への配慮を体

験した。私も式辞を述べ、会を与えられたので、この黙禱に対する礼を述べるとともに、「天皇の名のもとにアジア各地で殺戮が行われたことを思えば、被害を受けたこの地域の人々や、英国人、オーストラリア人から様々な意見も出るだろうが、私は個人として参加しているので、その問題にここでは触れたくない」と付け加えた。

二日目の朝、有志による礼拝があった。ゴザの敷かれた礼拝堂に約四十名が集り、それぞれの言葉と作法で、神に感謝を捧げた。ヒンズー教、回教、キリスト教、仏教と参加者が自由に神への賛歌と祈りの言葉を唱え、この上ない安らかなひと時であった。

人間が造った宗派の壁など、なんという愚かなものであろうか。人間の原点に戻って、お互いの根底にある生命への尊敬と感謝を共有できたことは、信心薄い私にも抗しがたい感動であった。私は生き生きと喜びに満ちて生きたいと思った。

三、「轍」を脱出する

私たちの身辺にある「轍」にはどのようなものがあるのだろうか。アジア、アフリカ各地で、宗教と部族



●開会式で挨拶するナイジェリア回教徒の指導者の一人、アルハジ・アド・バエロ王子

が複雑に絡みあつて、長い混乱が続けている。その例として何人かの発言を紹介したい。

サイム氏（バン格拉デッシュ）「独立以来、政治的安定がなく国民は貧困にあえいでいる。貧しい故に、いたる所に腐敗があり、底のないバスケットのようである。底をつくるのは、モラルの向上しかない。お互いに怒りから開放されて政治的安定が得られれば、政策は一定して経済開発も軌道に乗るはず。希望があつてはじめて我々は団結できる」

バガリア氏（インド）「職場で問題を起こす者がいても、その者に勇気を持って、人間的接触を試みないの

が常である。彼と人間的理解ができれば解決の糸口が分かるものだ。問題に関わっていかうとする勇氣が、我々に不足している。その勇氣の欠如は自己保身から出ている」

コール退役將軍(インド)「途上国の官吏の非能率と腐敗は深刻な問題である。彼らは、決定を次の人に任せてしまうのを常とし、決定する時も全体のためではなく自分の都合で決めてしまうのが問題だ。インドの問題については(ここで)インド人が集まって具体策をまとめよう」

四、解決に向かって一人でも立て

内なる良心に耳をすまし、それに従って行動に移す時、必ずしも周囲の理解は得られない。MRAの提唱者であるフランク・ブツクマン博士は「内なる声を聞き、それに従え」と言っている。

インドのバナジー氏が、労働運動を通じて得た原則は、一、何かを成すためには代償を支払わなければならない、二、その代償はたとえ一人でも支払う、三、困難な時には神が方向を示す、ということだった。彼は、「勇氣を持ってまず一人で働け。きつと、やがて誰かが君と共に歩んでくれる」と述べた。

五、終わりに

私たちは、MRAに集まって何をしようとするのか。信仰なら教会があり、社会問題や国際問題の解決にはそれぞれの研究会や政治団体などがある。国際親善には様々な企画が多数ある。MRAの目指すもの、それを最も明確に心に抱いている人々は英国人のグループではなからうか。彼らは、世界はこうあって欲しい、という理想を持ち、その実現のために働こうと決意している。そして、MRAはこうした人々に、宗派にも政治にも動かされない四つの行動規範を示し、実践の手ほどきをする。

もちろん一人でも立ち上がることはできるわけだが、MRAを通じて志を同じくするものが助け合い、励まし合うことはありがたいことである。そのために、MRAは同じ夢と理想を持った人々の出逢いの場を提供している。

さて、私たち日本人は、日本をどの方向に持って行こうとし、そしてそれによってどう世界にお役に立つのか。インドでの会議で、日本に対する暗黙の期待を感じたように思う。日本のMRAは、如何にしてこれに答えていけるだろうか。

事務局近況

●昨年十二月二日(土)に開催しましたチャリティバザーのご報告をいたしました。今回の総売上は二十二万一千四百六十五円で、純益金の十六万六千三百五十五円を昨年のMRA国際会議に特にアジア地域より参加された方々の滞在費の一部にあてさせて頂きました。ご協力下さいました皆様に御礼共々ご報告申し上げます。

●今回のバザーは四月一日(土)に開催する予定です。なお、今回の純益金はコー・マウンテンハウスのダイニングルーム改修費として寄付させて頂く予定です。ご家庭で不要の品(但し、未使用)がございましたら、ご提供下さるようお願い申し上げます。

●二月十七日より二十四日まで、コー円卓会議インドキャンペーンがボンベイ、デリー、パンチガニーなどで開催されました。日本からは中島正樹三菱総研相談役、尾関雅則鉄道総研理事長、今井正雄明電舎会長夫妻などが参加されました。レポートは次号で。

●豪州メルボルンのMRAセンター・アーマで行われている青年スタディーコースに日本から杉田恵美子さん(学習院大学法学部)が参加しています。●I M A J No.56は五月初旬刊予定です。

定期購読受付中

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌(英文年間11回発行)定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、ご希望の定期購読料(3ヵ月分=¥1,000 1年分=¥4,000 ※共に郵送料込み)を郵便振替(口座番号:東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下さい。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係



MRA
ワールドマガジン
FOR
A
CHANGE
フォー・ア・チェンジ